



2012年11月19日(月) 開催

テーマ:「「老い」の復権」

報告者: 藤 和彦(主任研究員)

概要

政府は2012年9月に「新高齢社会大綱」を発表、65歳以上の人口が24%に達した超高齢社会日本だが、本当の問題は「老いの思想」がないことではないか。

介護現場からは「老いへの何らかの価値を付与できない間は、どんなに充実した施設があろうと老いの悲惨は変わらない」という嘆きの声が上がっている。

儒教の敬老という態度は、高齢者自身の厳しい自己規制が引き換えだったが、現在の「老い」は人権の中で扱おうとしているので矛盾を抱えてしまっている(タマエの敬老、ホンネの嫌老)。

戦後の「死のタブー化」が、「老い」の価値を喪失した可能性がある。したがって、死の観念が変わると老いの観念も変わるかもしれない。

統計数理研究所の調査によれば、1958年に20歳代で「あの世を信じる」と答えたのはわずか13%だった(団塊世代は中心にあの世を信じない傾向が強い)。一方、2008年20歳代は49%は「あの世を信じる」と答えた(自然に揺り戻しがきている?)。東日本大震災以降この傾向はより一層進んだのではないか。

昭和20年8月、柳田国男は「先祖の話」という著書の中で従来の日本人がいかにも「あの世」を身近に感じているかを訴えたが、戦後の混乱、高度成長期を通じて、人々は生きるのに忙しく、特段の必要がないことから、神(あの世)について考えるのをやめてしまったようだ。しかし、歳をとるにつれて、誰でも自分の死を考えずにはいられなくなる。どうせ死んですべて消え去ってしまうと考えると現在や今後の人生がむなしくなる。

カールベッカー京都大学教授(宗教学)は、「体外離脱と霊体の現象を理論的に分析することにより、人間の意識が死後も存続するという結論に至った」と主張するが、人生後半期に入り、自らの人生の意味を見いだせない多くの日本人にとって、もしも、「生まれ変わり」が事実であると仮定したほうが、日常の小さな不満は無意味なものとなり、何の価値も持たないように見えた不幸や挫折が、逆に重要な意味を帯びてくる可能性が出てくるのではないだろうか。

いまだにデカルト理論レベルで宇宙を解釈する一般の科学者は、人々が科学で説明できない現象に興味を示した場合、それをオカルトと名付けるため、科学の教育を受けた現在の日本人のほとんどが嘲笑を恐れて超常現象に関する情報を無視する。しかし、最先端の物理学者(量子力学等)は、現在の科学で超常現象がすべて解明できなくても、超常現象自体をすべて人間の幻想であると片付けてしまってはならないと認めている。

30歳代以下ではスピリチュアルなものが流行っている。宗教の教えではなく自身が体験したものを重視し、超越的な次元にある「なにか」とつながる感覚を大事にするという心的傾向だが、自らの人生に何らかの実存的な意味を与えてくれるという点が魅力的である。若者たちがむなしさを産めるためにさまざまなものを漂流し続ける傾向に対して、「危険な面を全く考慮していない、お手軽すぎる」との批判も強い。

欧米では日本以上にスピリチュアリティの重要性が認識されており、1998年にWHOで「健康の定義」に「スピリチュアルな」面を追加すべきとの提案があった。心理学の分野でも、行動主義心理学や精神分析という「勢力」に加えて、人間性心理学が台頭しつつある。中でもトランスパーソナル心理学が勢いを増している感が強い。トランスパーソナル心理学は、「見えない世界」を重視し、スピリチュアリティ(私とは何者か)という問いに応えようとしているが、ほとんどの欲求を満たし終えた現代社会における「実存的空虚」は、自己実現という呪縛がその原因であるとする。

فرانクルは「重要なのは、人生一般の意味ではなく、各人の人生の個々の瞬間における特殊な意味であり、人間は自分の人生の意味が何であるかと問うべきではなく、むしろ、問われているのは自分であることを認識すべき」と指摘するが、人間の自由は、さまざまな条件からの自由ではなく、これらの条件に対して何らかの態度を取る自由であり、人間とは自己超越的な存在であることを認識すべきなのである。「幸福は自己超越の無意図的な副次的結果である」とするフランクルの言葉を肝に銘じたい。

檜尾直樹慶応大学准教授(宗教学)は「21世紀に求められているものは、個人の自律性を阻害しないで、個人が絶対的存在と合一することを援助する実践と思想の総体である」と「開かれた宗教」を提唱するが、神秘体験により慢心が起こらないようにしつつ意識の霊的次元を上げていくためには、行や祈りと同時に奉仕や臨床の実践が不可欠である。なぜなら、絶対的存在との合一が結果的に社会の次元で常に利他的に行為できるようになることと等しいと自覚していない場合、単なるトリッキーな変性意識状態を作るだけに終わってしまうからである。

人生の後半にさしかかった人達が身につけるべきは、シャドーを含むありのままの自分を受け容れて生きる知恵である。シャドーを統合する伝統的な方法論は「瞑想」。瞑想によって人生の自然な流れ、「老い」を受け入れられるようになるのではないだろうか。

イエローハットの創業者鍵山秀三郎は「できる人」より「できた人」をモットーに、国内外にトイレ掃除を通じた奉仕活動を展開しているが、長年の活動を通じて得たものは「やっている行為は小さく見えても、実は大きな意味があるものがある」ということ。

「瞑想と奉仕活動で長屋のご隠」を目指せ」が、老いの復権の第一歩であるとする。

以上